

三次市三良坂町長田所在

## 三隅山遺跡見学会資料



1～7号古墓調査風景

平成24年6月2日(土)

財団法人広島県教育事業団

三次市教育委員会

## 1 位置と環境

三隅山遺跡は三次市三良坂町長田に所在しています。遺跡の立地する丘陵の東側に江の川支流の美波羅川と合流する長田川が南から北に向かって流れています。遺跡からは長田地区の集落や北東方向に市街地を望むことができます。

三良坂町内では灰塚ダム建設など開発工事に伴って発掘調査が行われて、原始・古代の様子が次第に明らかになってきています。灰塚ダムに関連する調査では、縄文時代から奈良時代の遺跡がまとまって調査されました。なかでも土森遺跡から出土した弥生時代中期の土器に描かれた絵画は「サケ」の産卵を想わせます。湯免遺跡の弥生時代後期の住居跡からは鉄片（大陸産の可能性が高い）・タガネ・砥石などが出土し鉄器の製作を窺うことができます。土森遺跡の弥生時代から古墳時代初頭の住居跡から出土した「大型の甕形土器」は、山陰地域で出土している土器と同形態で山陰地域と強い繋がりが窺えます。古墳時代後期に江の川流域の古墳にみられる床面に土器を敷き詰め、板石を立てて床面を仕切る特異なものが見尾山第1号古墳でもみつきり、江の川流域の大きなグループが考えられます。田戸古墳からは銀象嵌を施した鉄刀が出土しています。杉谷遺跡群や道ヶ曾根遺跡では、7世紀後半の鉄生産に携わる大規模な集落が調査されています。

中世に入ると、鎌倉幕府の勢力伸張にともない、幕府に仕える関東武士らが西国各地に所領を得て続々と移住するようになりました。こうした中で、現在の三良坂・吉舎町域にあたる三谷郡にも武蔵国（神奈川県）から広沢氏が入部し和知に居住しました。広沢氏はその後、分割相続で実綱・実成兄弟がそれぞれの居住地にちなむ江田・和智氏を名のり、江田氏は現在の向江田から三若町にかけて、和智氏は和知および三谷郡東部を領有しました。当時の彼らの生活ぶりは、鎌倉時代末期の乾元元（1302）年にこの地を訪れ、両氏の館に滞在した中央貴族の娘・二条の日記『とはずがたり』に生き生きと描かれています。

鎌倉幕府の滅亡から戦国時代にいたる動乱の時期（14世紀半ば～16世紀）には、この地域にも数多くの山城が築かれるようになりました。三吉氏の比叡尾山城（畠敷町）や和智氏の平松城・南天山城（吉舎町）、江田氏の旗返山城（三若町）をはじめ、本遺跡周辺でも鷲巣山城跡や新宮城跡などが築かれました。こうした山城の中には、当時村としてのつながりを強めて自治を行ない、領主としたたかに渡りあうようになった百姓らの「村の城」もあったかもしれません。戦国の様相が深まる16世紀になると、この地域には山陰の戦国大名・尼子氏と安芸国・吉田からおこった毛利氏が勢力を伸ばしてきました。尼子・毛利という二大勢力の狭間において、この地域の人々の運命は揺れ動いたことでしょう。その後、天文22（1553）年の戦いで尼子氏に味方した江田氏が毛利氏に滅ぼされるに及び、備北における毛利氏の覇権は決定的となりました。このときの戦いでは本遺跡周辺も戦場となり、世羅方面から北上した毛利氏が「寄国固屋」を攻め、さらに新宮城や高杉城（高杉町）を落城させています。その後、毛利氏は中国地方の覇者へと成長を遂げ、和智氏や三吉氏などこの地域の領主もその傘下に入ったのでした。永禄11（1568）年には和智誠春とその弟・湯谷元家が毛利氏に謀殺される事件がおきましたが、誠春の子・元郷は許されて家を継いでいます。事件の翌々年に元郷が長田村の所領を家臣に与えたことが古記録にみえており、当時もこの地域が和智氏の支配下にあったことがわかります。この地域では中・近世の古墓も数多く見られますが、そこには乱世に翻弄された人々の鎮魂の思いが込められていることでしょう。



第1図 主な周辺(中世・近世)遺跡(1:25,000)(▲は古墓, ■は山城跡)

- |           |           |           |         |           |
|-----------|-----------|-----------|---------|-----------|
| 1 三隅山遺跡   | 2 鳶巣山城    | 3 竜王前古墓   | 4 小田山古墓 | 5 横路古墳    |
| 6 寄国古墓    | 7 溝口山城    | 8 新宮山城    | 9 的場山城  | 10 皆瀬1号古墓 |
| 11 皆瀬2号古墓 | 12 皆瀬3号古墓 | 13 皆瀬4号古墓 |         |           |

## 2 調査の概要

三隅山の発掘調査は、中国横断道自動車道尾道松江線建設事業に伴って平成 24 年 4 月 9 日から 6 月下旬までの予定で実施しています。

調査は現在進行中ですが、これまでに古墓 14、性格不明の落ち込み (SX) 1、溝 (SD) 3、土坑 3、柱穴多数を確認しています。出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器など弥生時代から古墳時代の土器も出土していますが、これらの土器は遺物包含層からの出土です。出土した土器のほとんどは土師質土器など中世の土器で、遺跡は丘陵の斜面を削り出して造成した平坦面に墳墓群を中心に溝や建物が建っていたと思われます。各遺構の詳細な時期の検討は調査中のため、不十分ですが大まかには、室町時代後期頃の墳墓群と思われます。

古墓群は、北側から 1～7 号墓、8・9 号墓、10～14 号墓の 3 つのグループに分かれています。1～7 号墓と 8・9 号墓は山側の裾に位置しており、10～14 号墓は 1～9 号墓より高い段に位置しています。1～7 号墓は方形あるいは方形に近い形状で 2 段程度に石材を積まれていました。規模は 1・2 号墓が一辺 0.6m 程度、3～7 号墓が一辺 1.5～1.7m 程度です。1 から 3 号墓は下部に土坑などは確認できていませんが、4～6 号墓は上部の石材を除去すると径 0.5～0.6m の範囲で小礫が小土坑に落ち込んだ状況で確認出来ました。7 号墓は内側で約 0.6m 四方に組まれた石の上に「×」字が掘り込まれた板状の石材が置かれていましたが、石の下からは何も出土していません。8・9 号墓も一辺 1.5～1.7m 程度で、10 号墓は 1 m×2 m 程度の長方形の範囲で円礫が積み状態でしたが、いずれも下部に土坑は確認できていません。11～14 号墓は径 1m 程度の土坑の中に礫が落ち込んだ状況で出土しています。

古墓群からの遺物は 10 号墓から、播鉢片が 1 点出土しています。

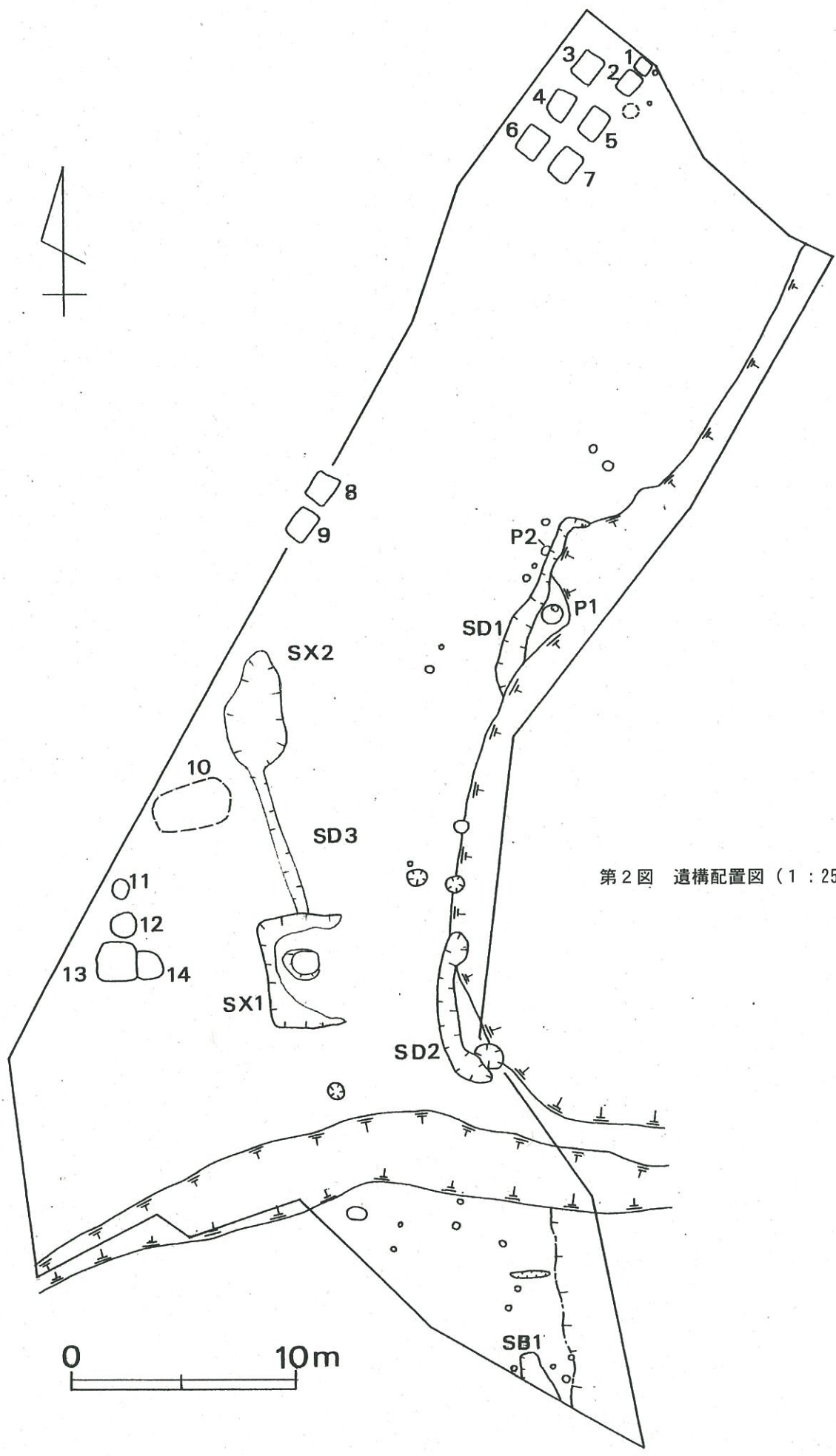
SX 1 は性格不明で当初は竪穴住居跡として、調査を進めましたが平面が最大幅 5 m の不定形となり、多量の石が投げ込んだ状態で出土し、中央付近が掘り込まれず「島」状に残っていることと SD 3 が北側の山裾から SX 1 に掘り込んでいることから、水を溜めていたと思われます。遺物は土師質土器の皿や亀山焼の破片が出土しています。

SD 1・2 は斜面に対してほぼ平行に掘り込まれており、本来は同一の溝であった可能性も考えられます。遺物は土師質土器の皿の破片が出土しています。

柱穴の並びは明確ではありませんが、P 1 から土師質土器の皿が 1 枚、P 2 からは土師質土器の皿 12 枚と鉄器（錆で覆われて何かは不明）が 1 点出土しています。

## 3 おわりに

当地域では、原始古代の遺跡の調査が進み当時の様子が明らかになりつつありますが、中世遺跡の調査は山城跡や石塔など現存している遺跡などに比べ、進んでいるとはいええない状況と思われます。今回の調査は、古墓の下部構造や当時の墓域のありかたなどを検討する上で貴重な調査例となりますが、詳細についてはこれからの調査と整理作業で明らかにしたいと思います。



第2図 遺構配置図 (1 : 250)



1～7号墓検出状況（西）



1～7号墓下部検出状況（南西）



6号古墓検出状況（南）



7号古墓検出状況（東）



6号古墓下部集石（西）



7号古墓下部石組（東）

時代	西暦	できごと
平 安 時 代	1156	保元の乱
	1167	平清盛が太政大臣になる
鎌 倉 時 代	1185	平氏が滅亡
	1192	源頼朝が征夷大將軍になる
鎌 倉 時 代	1221	承久の乱
	1274	蒙古襲来
鎌 倉 時 代	1281	蒙古襲来
	1333	鎌倉幕府が滅亡
鎌 倉 時 代	1334	建武の新政
	1336	足利尊氏が征夷大將軍になる
室 町 時 代		↑ 南北朝の動乱 ↓ 南北朝の統一
	1392	南北朝の統一
室 町 時 代	1467	応仁の乱 (~1477)
		↑ 戦国の動乱 ↓ 戦国の動乱
室 町 時 代	1590	豊臣秀吉が天下統一
	1600	関ヶ原の戦い
		1192 広沢氏が備後国三谷郡に 所領を得る (江田・和智氏の祖)
		広沢実高 — (江田) 実綱 — (和智) 実成
		1302 二条が和智・江田氏の館を訪れる <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">史料1</span>
		1553 毛利氏が江田氏を滅ぼす
		1555 毛利氏が巖島合戦に勝利
		1569 毛利氏が和智誠春兄弟を殺害
		1570 和智元郷 (誠春の子) が家臣に 長田村の所領を与える <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">史料2</span>

史料1 『とはすがたり』巻五

・(和智氏の館)をたづぬるに・  
あるじが有様を見れば、日ごとに  
男・女を四・五人具しもてきて、う  
ちさいなむ有様目もあてられず。こ  
はいかにと思ふほどに、鷹狩とかや  
とて、鳥ども多く殺し集む。狩りと  
て猪もてくるめり・・・江田といふ  
ところにこのあるじの兄のある  
が・・・この江田といところは、若  
き娘どもあまたありて、  
情あるさまなれば・・・先の住まひ  
よりは心のぶる心地するに・・・

史料2 『萩藩閥閥録』巻一九

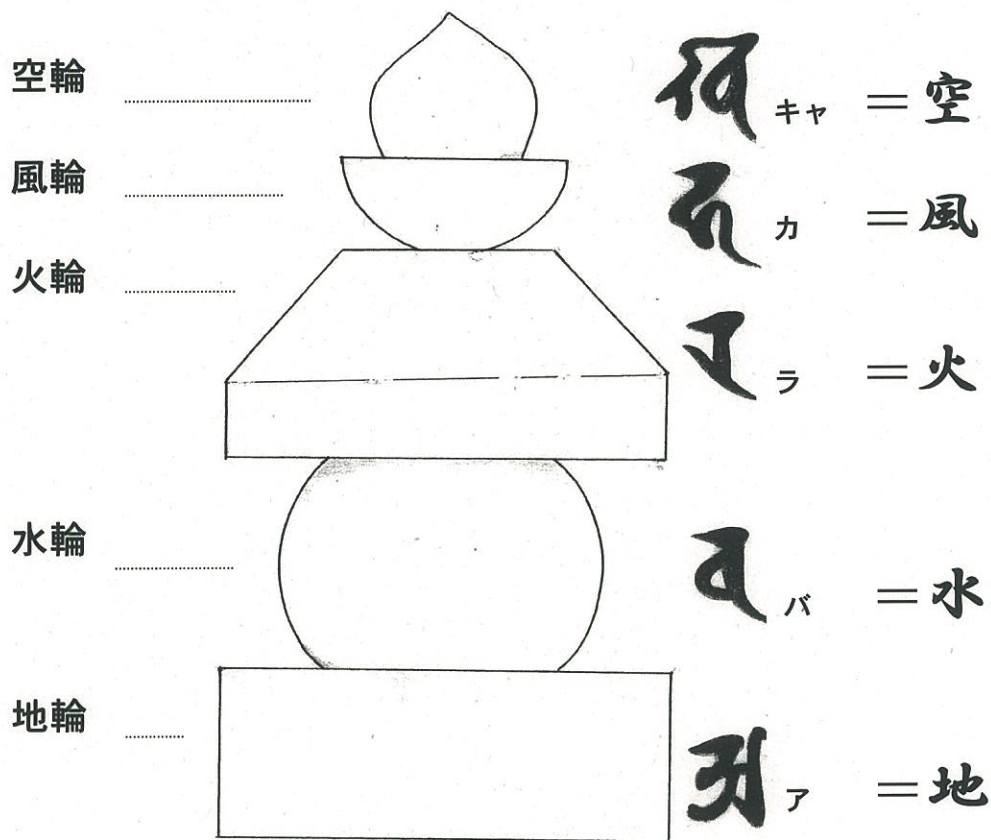
為加恩、於長田村宗俊久光半名遣置  
候、向後之處別而奉公肝要候、猶小  
河内刑部丞可申候、仍如件

永禄十三  
(1570)

二月五日

元郷 (和智)  
判

「平佐左近大夫殿 元郷」



## 五輪塔

五輪塔は形の異なる五つの石を積み重ねた墓石・供養塔です。石は、下から順に地輪（方形）・水輪（円形）・火輪（三角）・風輪（半円）・空輪（宝珠形）と呼ばれ、仏教で宇宙の構成要素とされる「空・風・火・水・地」をあらわしています。石には上図のような文字を刻む例が多く、その他に時代や宗派により「妙・法・蓮・華・経」や「南・無・阿弥・陀・仏」の文字を刻む場合もあります。また、墓下や地輪などに施設を設けて遺骨を納めた五輪塔もあります。五輪塔の造立は平安時代中期頃にはじまりました。その後、鎌倉・室町時代を通じて一般に広がり、現在に至るまでもなお一種の墓標として用いられ、非常に長い歴史をもっています。

なお、現在一般的な方柱形の墓石は江戸時代にはじまったものです。